

ヘルシーサービスの自然災害に備える取り組み

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災において、仙台東営業所（当時）は多大な被害を受けました。その被害は、入居者様ならびに職員の生活基盤の壊滅、日常生活機能の断絶等、これまでに経験した事が無いものでありました。

職員も被災する中で、入居者様の生活を誰が支えるのか、災害への備えや対策が施されていない中、どのように食料や生活用品を調達するのか、さまざまな課題が顕在化しました。

しかし、望ましいことかどうかは別として、職員は自分自身や家族のことを後まわしにして、直面する課題に一丸となって入居者様を支える取り組みを行ってまいりました。職員が、ホームで何日間も寝泊まりして業務に当たるケースも見られました。

当社はこの時の経験したことを教訓として共有し、今後活かしていかなければならないと思っています。

当社の自然災害に備えた取り組み

高齢者福祉施設等においては、一旦、災害が発生すると、入居者様の生命に危険が及ぶような被害を受ける恐れがありますので、日頃から、災害に備える対策が求められます。

万が一災害が発生した場合、どのような手順・方法で対応すれば、その被害を最小限に食い止められるか、ホームの立地環境や規模、構造など個々の状況を把握しながら、それぞれに適した計画を作り、対策を立てています。

特に入居者様の生命、身体の安全を確保するためには、緊急時においても最低限の介護サービス提供の維持、継続が求められるので、あらかじめ計画し備えておくことがとても重要です。これら事業継続計画(BCP)については、全国すべての介護会社に義務付けられております。

まず、自然災害が発生した場合のリスクを以下のとおり定義づけています。

- ・入居者様、職員の死傷
- ・建物、設備の損壊
- ・社会インフラの停止
- ・災害対応業務への人手不足
- ・生活支援物資の枯渇

その上で安全対策として、以下を講じています。

- ・ホームの立地環境の確認ならびにそのリスクの洗い出し
- ・上記を踏まえたホーム内、ホーム外の安全対策の実施
- ・社内外との連絡体制、社内応援体制
- ・備品の確認ならびに備蓄

【備蓄について】

有事には、行政や本社からも即座にホームへの救援活動を実施できない可能性があります。このため外部からの救援活動を受けられなくとも、少なくとも最低3日間はホーム内で入居者様並びに職員の生活が維持できるように水、食料、その他必需品を備蓄しております。



<いつでも使えるように準備しているもの>

- ・非常用食料
- ・水
- ・医薬品
- ・携帯電話（充電器）
- ・懐中電灯
- ・電池
- ・ラジオ
- ・カセットコンロ
- ・ガスボンベ



【災害時に備えた職員への研修／消防訓練の実施（年2回以上）】

あらかじめ定められた役割分担に即した行動できるよう、職員一人ひとりにホームの消防計画や災害対策マニュアルを十分理解させるための研修を実施しています。

また、日勤帯と夜勤帯を想定して各ホームにて避難訓練を実施しています。

ご家族へのお願いしたいこと

1. 連絡手段の確保

災害時には通信手段が制約されることがあります。ご家族はホームとの連絡手段を確保し、状況や安全確認のために緊急時の連絡先をお知らせください。

2. 避難計画の共有

ご家族はホームの消防計画を把握し、災害時の避難経路や指定された避難場所について把握をお願いします。これにより、必要な場合には的確な行動が可能となります。

3. 心理的サポート

災害は入居者様にとってストレスフルな状況となります。ご家族は電話や面会などで心理的なサポート、安心感を与えていただきたく、お願いいたします。

ご家族の援助は入居者様だけでなく私たちにも安心感を与えていただけるものです。連携を強化し、お互いにサポートし合えるようご協力をお願いします。

3.11 を忘れない

2011年、東日本大震災の時に、被災した仙台東営業所（当時）の職員が経験したこと、感じたことを当時の職員に書き出してもらいました。

大規模災害時の「備え」として活かしていただければ幸いです。

- ・皿にラップを敷いて水で洗わないようにした。
- ・器具にあった電池サイズが無く困った。
- ・自家発電機、投光機が供給されたことによって夜間の照度が格段に上がった。ただし燃料（ガソリン）を購入、保管する携行缶が無いと継続して使用することが出来なかった。
- ・職員から供給された灯油ストーブで暖をとることができた。
- ・食料を調理するのにカセットコンロが重宝した。
- ・生理用品の準備が必要であった。
- ・情報収集はラジオに頼った
- ・ゴミ袋は様々な使い方ができた。（水を入れる、上半身にかぶり防寒 etc）
- ・ラップを体に巻けば寒さ対策にも効果があった。
- ・ポリタンクで飲み水の保管ができた。
- ・懐中電灯等電池を使う器具は初期段階で役立ったが、電池が無くなった時にはロウソクだけが頼りだった。
- ・入居者にネームプレート着用していただくことにより、外部からの支援者が入居者を間違いなく認識でき、コミュニケーションがスムーズ図ることができた。配膳、配薬の時にも誤配を防ぐことができた。
- ・夜間トイレ介助誘導時は片手に懐中電灯を持ちながらなので介助誘導は困難であったので、ヘッドライトがあれば便利であったと思う。
- ・排泄時、排尿はポータブルトイレへ誘導、排便はトイレへ誘導することによって、節水することが出来た。
- ・パソコンデータのバックアップは必ず必要と感じた。
- ・電気が不要で通話可能な黒電話一台あれば便利かもと感じた。
- ・雨中、外での作業も度々あり、長靴は何足か必要と感じた。
- ・居室内の家具等はほぼ倒れてしまったので、家具類の転倒防止が必要であった。
- ・クレジットカードが使用できないので現金が重宝した。
- ・停電でも給油出来るガソリンスタンドの情報を把握しておく必要があった。
- ・介護ベッド用マットを敷き布団として使用できた。
- ・トイレ使用後のトイレットペーパーは別箱に捨てることによって節水、詰りを予防する事ができた。
- ・ペットボトルにお湯を入れて湯たんぽとして使用することができた。
- ・口腔ケア時うがい薬を使用した。
- ・単調な生活が続く時間の感覚が無くなるため、適宜口頭で時刻を伝えた。
- ・布団上での生活が続く、テーブル代わりに布団を置いて食事をした。
- ・処方箋が無くてもお薬手帳だけで薬局で薬を受け取ることが出来た。
- ・支援者は現地職員も被災者であることを忘れないで欲しい。
- ・震災直後、浴槽に溜めた水がトイレを流すのに役立った。
- ・物資の供給や人の派遣を理由に、警察から緊急車両通行許可書を交付してもらい高速道路を往来することができた。
- ・デマや誤った情報が入るので、正確な情報を集めることに苦労した。
- ・被災直後は、焚火でご飯を炊いた。
- ・入居者の中には集団行動がとれない方がいるので、適宜判断や対応が必要であった。



以上